

## 研究課題 85

# 新制大学 1 回生の活躍にみる草創期の女性建築家に関する研究 —山田初江に着目して

発表 片山 伸也 青木賀津子 宇津 奏子  
研究メンバー 篠原 聡子 小川 信子 定行まり子 木下 壽子  
井上明日香 吉永 沙織 伊藤 瑠香

### 1. はじめに

#### ●研究背景と目的

本研究は、本学住居学科の新制 1 回生（生活芸術科 1951 年卒）である、建築家山田初江の設計資料整理を通して、その設計活動の全容を明らかにするものである。その分析から、戦後日本の建築界における女性建築家の設計手法ならびに設計思想を明らかにすることで、当時、女性が建築を学ぶことができる数少ない高等教育機関であった本学の建築教育の社会的意義を浮き彫りにすることができると考えられる。

#### ●設計関係資料受入れの経緯

山田は、同じく生活芸術科 1 回生で、建築家の林雅子とともに、戦後に活躍した女性建築家の草分けである。林・山田は 1958 年に中原暢子とともに「林・山田・中原設計同人」を設立し、約 40 年間にわたって設計活動を継続した。2022 年に逝去され、生涯にわたって取り組んだ建築作品の設計図・施工図・スケッチなど 1 万点を超える資料がご遺族ならびに元所員の元にまとまって残されていることが確認され、ご遺族らの意向を受けて設計資料の整理とアーカイブ化を行うこととなった。

#### ●研究経過と今後の展望

##### (1) データベースの作成

- ・図面資料の整理：物件ごとの図面種別を整理し Excel に入力、設計図書のスキャン作業を行い、将来的にはデジタルアーカイブとしての活用を視野にいれている。
- ・現存物件の確認：図面情報だけでは竣工に至らなかった物件を特定できないため、Google マップならびに登録簿を参照しての物件所在地の特定と竣工・現存の可能性の確認を行った。所在地が特定された物件については現居住者に向けたアンケートを送付し、建物の存否、居住者の変化について確認を行っている。

##### (2) 設計手法・設計思想の分析

- ・間取りの分析：図面資料を用いて、居間、食堂、台所の関係に着目した分析を行い、特に台所と他の室との連続性を明らかにした。(2024 年度)

山田の住宅作品の特徴とも言えるファミリールーム、フォーマルリビングに着目し、家族の団らん空間と社会的空間を併設する設計思想の分析を行っている。(2025年度)

- ・言説の収集：山田自身の言葉で設計思想を語った著書ならびに建築雑誌、一般誌掲載記事を収集。

### (3) 山田初江の住宅作品の評価

- ・現存物件の居住者に対するヒアリング

自邸含む3件の居住者に対するヒアリングを実施(2024年度)。今年度も現居住者に対するヒアリングを継続中。施主ごとに提案された生活空間が、施主家族のライフステージに応じてどのように住まい方の変化を受容したかが明らかになりつつある。

## 2. 設計関係資料からみた建築家山田初江

### ●山田初江設計関係資料の内訳

2022年の山田初江の逝去後に、本学が預かることとなった設計同人所有の旧蔵資料(「建築家・山田初江設計関係資料」(以下山田初江設計資料と略す))は、主に山田の担当作品における図面・スケッチ・メモなどの図面資料で、資料総数は1万点を超える(12,168点(2025年末時点))。加えて、建築写真、打合せ資料、契約書・建築確認申請書類等の設計関係資料が約300点あり、山田と施主とのやり取りを記した書簡など、設計に至る経緯を知るための貴重な資料も含まれている。

図面の種類は計画図・実施図・施工図などで、さらにこれらは手描きのトレーシングペーパーによる原図と、感光紙に印刷された青焼き図に分類される。一般的に、すべての設計図面の基本となる主要な図面は、のちに複製ができるように、原図といわれる半透明のトレーシングペーパーに描かれ、山田初江設計資料の原図も同様に、トレーシングペーパーに鉛筆またはインキングによって作図されている(図1)。原図は、設計同人設立から解散(1958～2003年)までに山田が担当したほぼすべての作品で現存しており、その保存状態は極めて良い。

山田初江設計資料のうち、1970年代初め頃までの多くの作品で、第二原図(原図の複製による劣化防止のために作成される複製専用の原図)が遺されている(図2)。なかには、青焼き図の紙面上に、実施設計時の推敲の跡とみられる手書きのメモやスケッチが描かれているものがあり、山田の設計過程を窺い知ることができる。

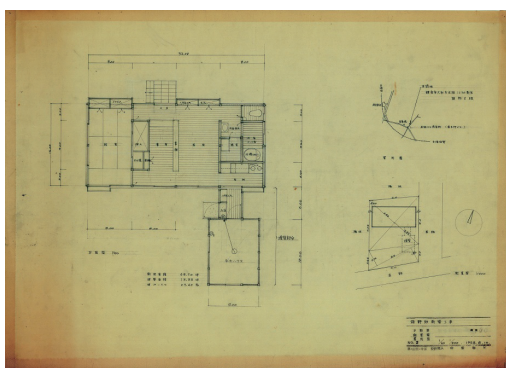


図1 原図

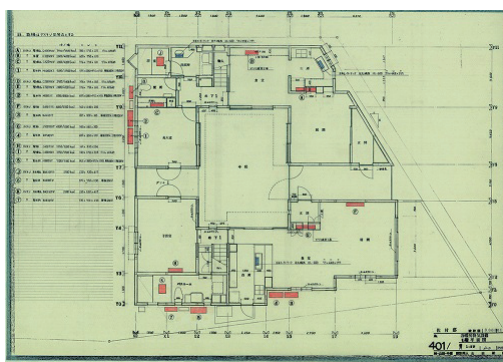


図2 第二原図

原図を感光紙に複写した青焼き図と呼ばれる図面は、一般的に、実施設計図の複写図として設計者や施工者が手もと資料として打合せに携行したり、工事現場などに据え置かれたりする。山田初江設計資料には、山田のほぼすべての作品の青焼き図が現存しており、1950年代頃の青焼き図は青地の感光紙に、1960年代以降の青焼き図は白地の感光紙に複写されたものである（図3・4）。紙面上には、工事経過における変更点、懸案事項などが描き込まれており、山田と施工者・施主とのやり取りが読み取れる。

図面資料に含まれるスケッチは、主に基本設計段階における計画図として、その筆跡などから、山田自身が手描きで描いたものと推定される。スケッチ以外にも、家具や各部のディテールを検討する際に描かれたとみられるメモやラフスケッチが多数現存する（図5）。またインテリアパースと呼ばれる手描きの室内透視図も複数現存している（図6）。特にダイニングやリビングなどの透視図が多く発見され、山田が住宅の主要な居室をダイニングやリビングと捉え、空間の三次元的なイメージを住み手と共有することを重視していたことが明らかとなった。

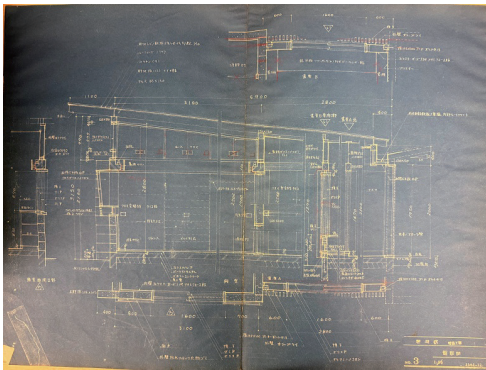


図3 実施設計図（複写図・青地感光紙）

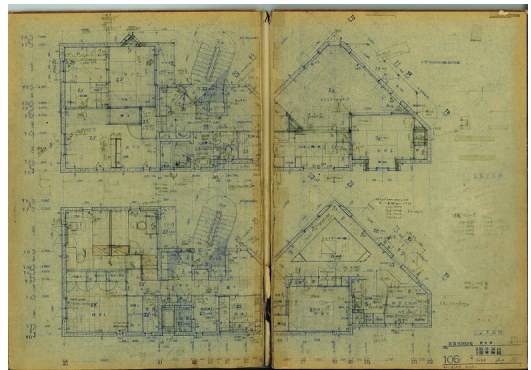


図4 実施設計図（複写図・白地感光紙）

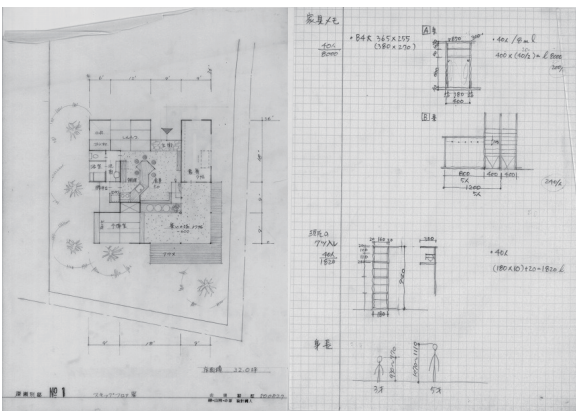


図5 スケッチ（左：計画図・右：家具図）

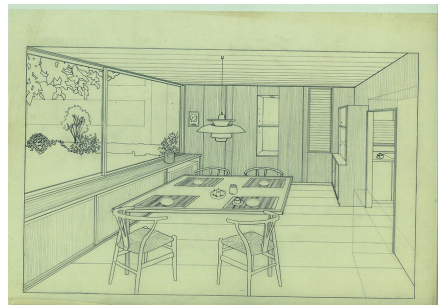


図6 インテリアパース

### ●山田初江設計資料の整理手法

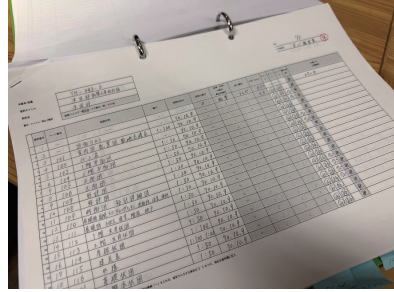
山田初江設計資料の整理にあたっては、資料を預かり受けた際に資料が格納されていた図面ケース・段ボールなどの保存箱（写真1）をもとに資料目録を作成することを出発点としている。



写真1 保存箱 (図面ケース・筒)



写真2 細目録



まずは、保存箱を基本として、図面種別・形態・枚数のほか、作品名等の基礎情報の資料目録データベースを作成し、つぎに、この資料目録データベースを下敷きに、物件目録（作品リスト）を作成して、各物件の用途規模、所在地、施主情報、竣工・現存の有無などの詳細なデータを集積している。さらに、保存箱内の資料内訳を細目録として作成し（写真2）、一枚一枚の図面名称などの情報をデータベース化すると共に、図面をデジタルデータとしてアーカイブしている。これらの作業には、日本女子大学建築デザイン学部の1・2年生が中心となって取り組んでいる。手描きの設計図面をはじめとする山田初江設計資料は、建築家がアイデアを図面に投影する生の現場を学べる一次資料として、学生に貴重な機会を提供しており、本学の設計教育教材として有効に活用されている。

### ● 建築家としての山田初江

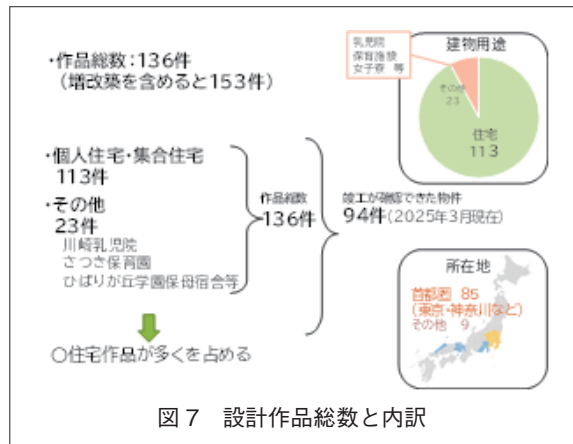
ここで改めて建築家・山田初江を概観する。山田初江（1930～2022年）は、林雅子・中原暢子とともに「林・山田・中原設計同人」を主宰し、戦後の建築界で活躍した女性建築家の草分けである。林、中原はその設計活動と作品における研究が進み、活躍の軌跡は広く認知されるいっぽうで、山田については先行研究がなく、その設計活動について詳細が知られておらず、建築界においても建築家・山田初江の明確な位置付けはなされていない。

本研究では山田の全キャリアをカバーする設計資料群を扱っており、その調査過程で山田の設計活動の総体が徐々に明らかとなってきた。以下に、山田初江設計資料から判明した山田の設計作品と設計活動の全容を示すとともに、山田のライフヒストリーとの関わりから、建築家としての山田初江の足跡を明らかにする。

#### (1) 設計作品の総数と内訳

設計関係資料の整理において、図面に記載された図面名称などから作品名を判別した結果、計画案、実施案を含め、作品数は136件を数えた（設計同人以前の作品4件を含む）（図7）。さらに、増改築作品を加えると、作品総数は153件にのぼる。これらの図面内容から建物用途を分類したところ、個人住宅・集合住宅が113件、その他の用途が23件と、住宅作品が多くを占めた。住宅以外の用途では、乳児院、保育所、幼稚園、女子自立援助施設、女子寮など、女性や子どもの福祉に関わる設計が中心であった。設計同人の林や中原の担当作品には、同種の用途の設計作品はほとんどみられないことから、山田が女性や子どもの住空間の設計に意欲的に取り組んでいたことが窺える。

これらの作品群について、2025年3月現在で、136件のうち94件が実際に竣工したことを確認しており、現在も竣工作品の存否を確認する調査を継続している。また現存する物件のうち、85件が東京・神奈川などの首都圏に所在していることが判明した。これまでに実施した、元所員・施主へのヒアリング調査からは、神奈川県鎌倉倉市に居を構えていた山田が湘南地域を中心とした神奈川県内の案件を担当したことや、事務所のなかでも、特に子どもの住空間づくりを得意としていた山田が、子どものいる世帯の住宅や、女性や子どもの地域施設の設計を請け負っていたことがわかっている。

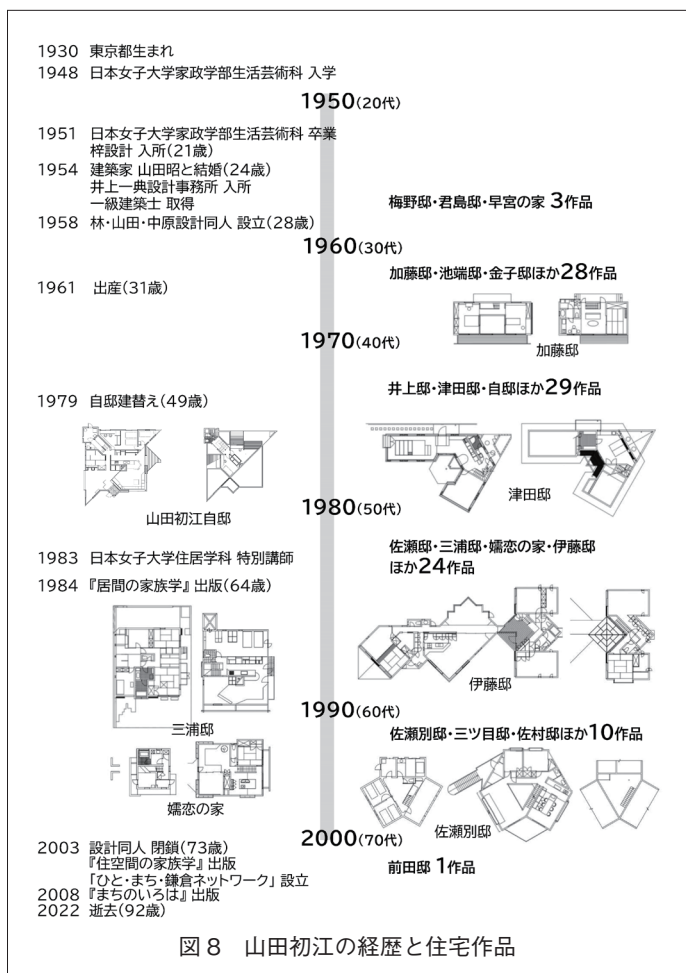


## (2) ライフヒストリーと設計活動の総体

1930年に東京都に生まれた山田初江は1948年、日本女子大学家政学部生活芸術科の1回生として入学、卒業後は梓建築設計に入所し、女性建築家の先駆けとして活躍した(図8)。

その後も井上一典設計事務所で経験を積み、一級建築士の資格を取得した。1958年には、同じく生活芸術科の1回生であった林雅子、女性建築家の組織であるポドコ(PODOKO(PENSADO・ISKUTADO・KREADO))で活動をともした中原暢子とともに、28歳の若さで林・山田・中原設計同人を設立して独立を果たした。

私生活では、1954年に建築家の山田昭と結婚し、出産・育児を経て、家庭との両立をはかりながら、事務所が閉鎖されるまでの45年にわたり、設計活動に従事



した。

竣工した作品のうち、住宅作品を中心にみると、事務所開所当初から30代～40代にかけては、年間3～5件程度のペースで精力的に住宅設計に取り組んでいる。40代後半には、数多くの住宅設計で得た豊富なノウハウを自邸（鎌倉の家）の設計に結実させている。50代は住宅作家としての成熟期といえ、計24作品を世に出した。60代は作品数は減少しながらも、なお10作品もの住宅作品に携わり、73歳の時に、それまでの仕事の集大成として自著、『住空間の家族学—「心・体」感覚で考える』（彰国社、2003年）を上梓した。

自邸の設計においては、1979年2月から5月にかけて、意匠図、構造図、設備図を含む実施設計図が、合計69枚作図されており、図面に記載された山田のサイン、内容・筆跡等から、意匠図すべてが山田自らの作図によるものであると推定され、自邸設計への山田の強い思い入れが窺える。自邸が竣工した1979年以降の作品には、オープンキッチンを内包したファミリールームなど、自邸と類似した空間・意匠がみられるものがあり、自邸設計によって、山田のオリジナリティを特徴づける住宅設計の理念や作法が確立したと考えられることから、以下の章では、自邸設計における空間的理念を分析した。

### 3. 住まい方からみた自邸「鎌倉の家」の空間理念

#### ●山田初江と自邸「鎌倉の家」

1979年に完成した山田初江設計の自邸「鎌倉の家」は、山田の住宅作家としてのキャリアの中で核となる作品と考えられ、その空間理念は、その後の作品にも影響を及ぼしていることが推察される。設計資料、建築空間観察、ヒアリングから、建て替え前後の住まい方の変遷を辿り、「昭和初期の家」における空間的な要求が、「鎌倉の家」の設計提案にどのように反映されたのかを明らかにする。



「鎌倉の家」外観

出典：建築文化 404号 (1980.06)/ 彰国社



ファミリールーム

出典：モダンリビング (1981.No.10)/ ハースト婦人画報社

●「昭和初期の家」の住まい方

(1) 設計資料に基づく分析

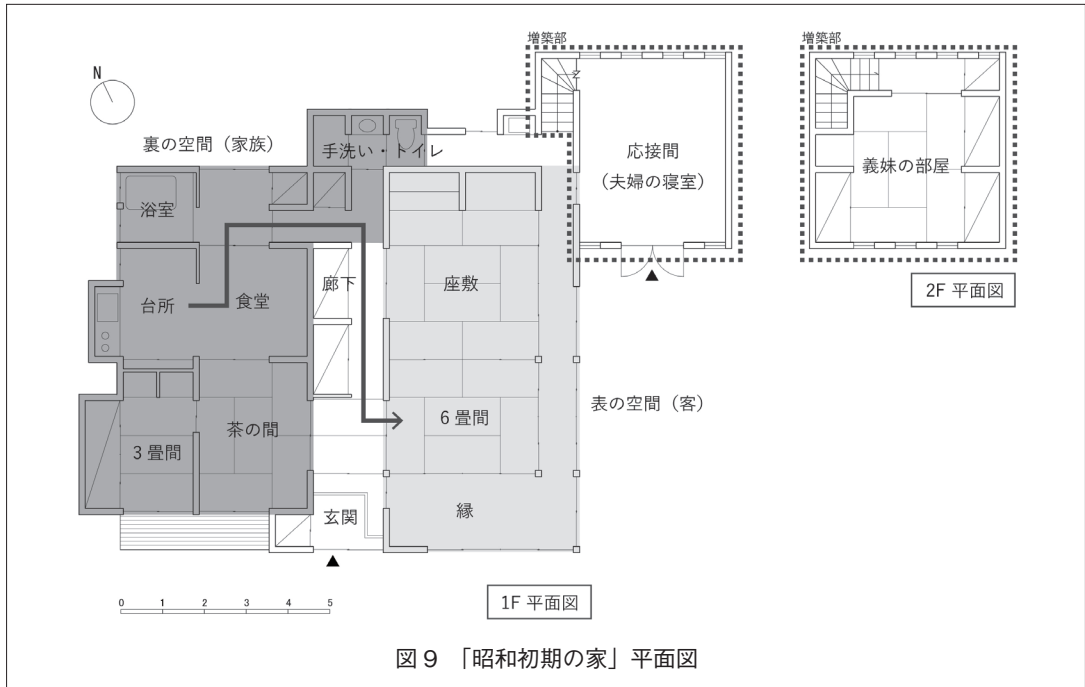


図9 「昭和初期の家」平面図

山田は1954年に24才で結婚し、夫の実家である「昭和初期の家」に住んでいた。竣工時期は1920～30年頃と考えられる。間取りは、廊下を介し表の空間（南東側の座敷・6畳間）、裏の空間（北西側の台所・食堂・茶の間・3畳間）に二分されている（図9）。著書『住空間の家族学—「心・体」感覚で考える』（彰国社、2003年）では当時の封建的な価値観がかたちとして実在していたことが語られており、表の空間は接客の場であり、家族のための裏の空間や北側の水回りは、光が入らず暗かったことがわかる。

「鎌倉の家」の設計図と共に保管されていた、著書『住空間の家族学—「心・体」感覚で考える』の原稿（図2）には、縦軸を時系列とした室名が記載されており（「茶の間」が「娘の室」に、3畳間は「お手伝いさんのへや」から「父の室」に、6畳間は「両親寝室」から「義父寝室」となり「居間」に）、家族構成に合わせて用途が変化していったことがわかる。

また著書『住空間の家族学—「心・体」感覚で考える』（彰国社、2003年）では、伝統的な住まいから学ぶこととして、「視線を低く住む」「空間の転換を図る」「藪と晴の場を両立させる」「融通無碍な空間の登場（襖・障子の開閉による広さの自由度、簾による風の抜け、家族間での気配の共有）」「自然との応答」を挙げているが、原稿（図10）に「冬 フスマ 障子」「夏 とり払い スダレ」とメモがあるように、「昭和初期の家」の生活における学びでもあったことがわかる。著書<sup>(1)</sup>でも、「昭和初期の家」の大掃除の際に建具や畳を取り払った際の広々とした空間の出現について、忘れられない劇的な変化であったことが語られている。

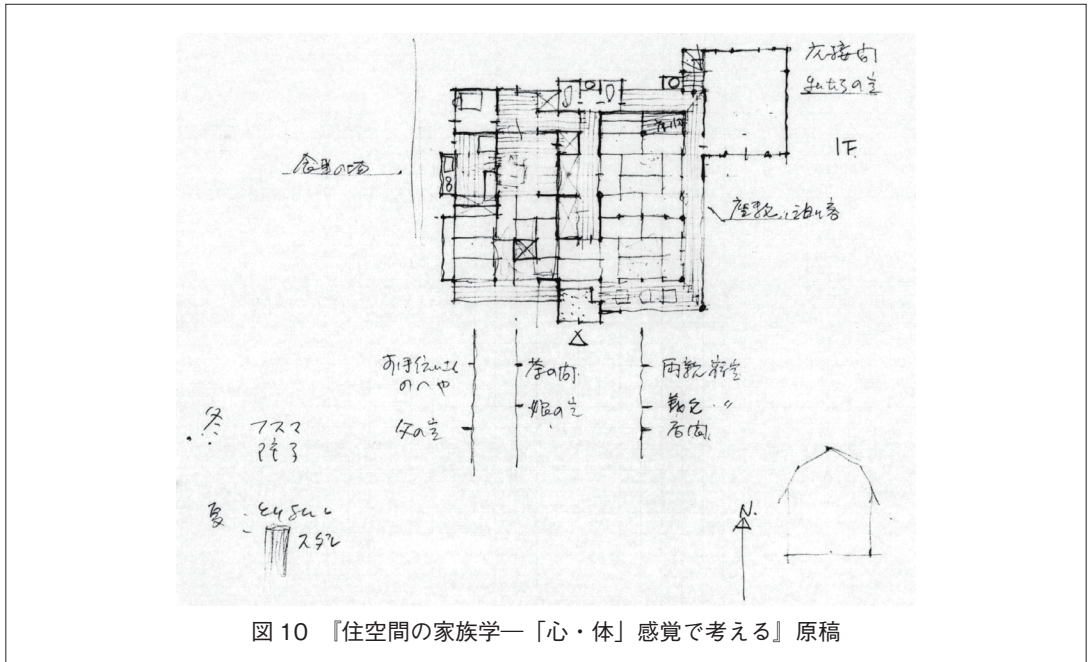


図10 『住空間の家族学—「心・体」感覚で考える』原稿

## (2) ヒアリングに基づく分析

山田は夫の両親と義妹と同居をはじめ、1961年に娘が生まれた。夫の両親が亡くなり、1972年からは山田の父が同居していた。食事については、朝食は「食堂」で、夕食はテレビや炬燵のあった「茶の間」でとっていた。茶の間が娘の室に変わり、南東の6畳間が「居間兼食堂」となったが、縁によって光は入らず暗かった。また台所での調理が家族の集まる空間から離れ孤立しており、動線も長かった。また茶の間が娘の室となったのは娘の希望からであったが、玄関から台所への通路も兼ねておりほとんどプライベートがなかったという。来客の宿泊時や葬式の際に、座敷と6畳間の間の建具を取り払い繋げて使用していたこともわかった。

## ●「鎌倉の家」の住まい方（1979年竣工）

### (1) 設計資料に基づく分析

1978年に竣工した「鎌倉の家」は、間取り（図11）からは一見大胆な45度を基に計画されているように見えるが、空間が段差や家具によって緩やかに仕切れつつ繋がっていることで、広く大らかに感じられる。1階には2つの居間があり、家族が気兼ねなくくつろぐことの出来る「癒」の空間であるファミリールームと、玄関ホールや客間を兼ねた「晴」の空間であるフォーマルリビング<sup>(注1)</sup>が、段差で繋がっている。またキッチン、和室、夫婦室と書斎、山田の父の部屋があり、廊下を通じて回遊することが出来る。半階下にはユーティリティと水回り、半階上には浴室と洗面、2階には娘と義妹の個室があり、スキップフロアとなっている。実施設計図（複写図）となる青焼き図（図12）には山田の手描きで、家具やキッチン、建具の細かなおさまりが描き込まれており、現場で丁寧なディテール検討をしていることがわかった。

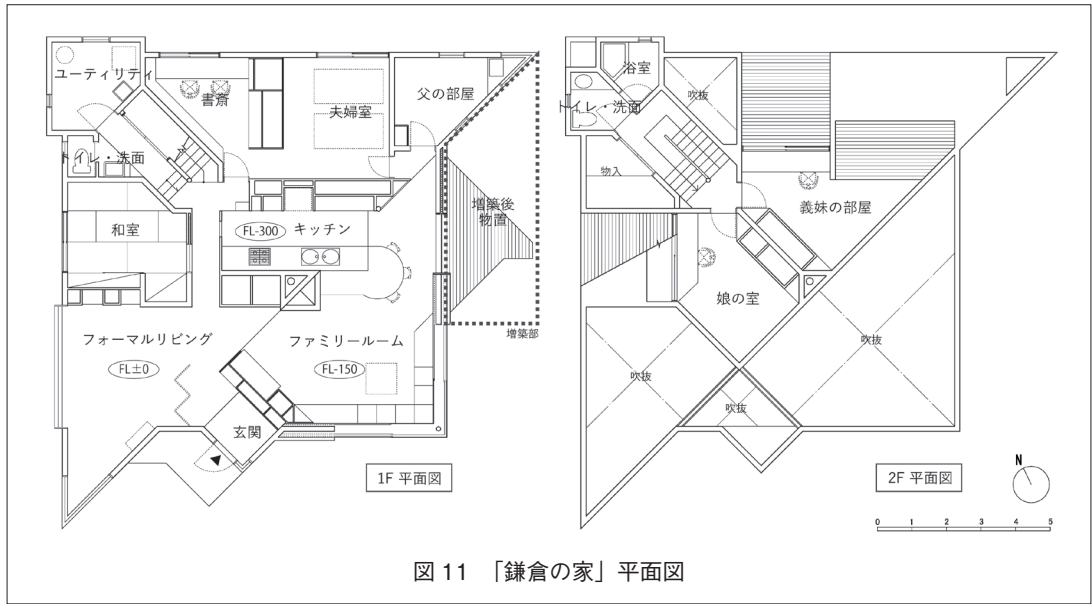


図 11 「鎌倉の家」平面図

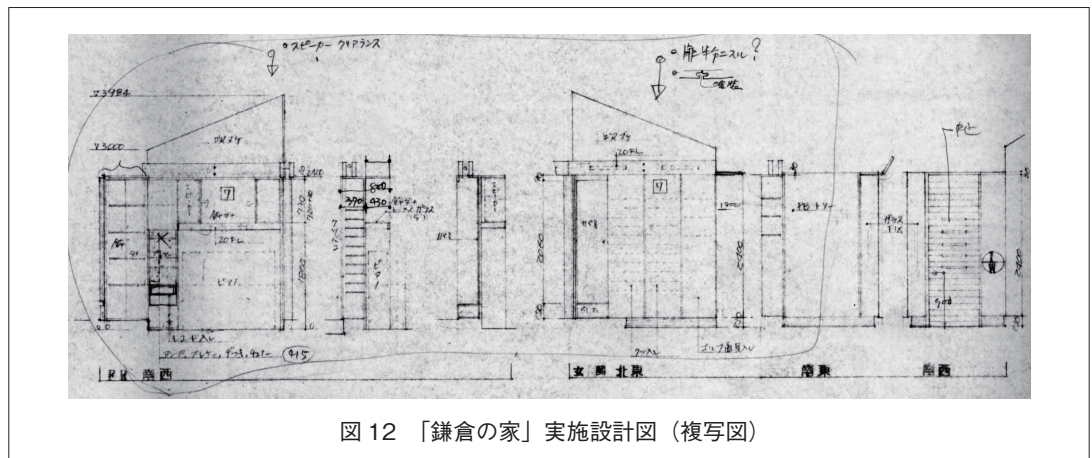


図 12 「鎌倉の家」実施設計図（複写図）

## (2) ヒアリングに基づく分析

「鎌倉の家」の竣工当時、山田夫妻、義妹、娘、山田の父の5人暮らしであったが、山田の父が親族の元へ移り、その後娘が結婚して家を出ている。2000年には夫が亡くなり、2007年からは娘夫婦が同居し、親しい建築家に増築を依頼した。和室が娘夫婦の寝室となり、山田は娘の室を自室とした。2022年に山田が亡くなった後は、娘夫婦と義妹の3人が暮らしている。

ファミリールームが一番陽が入る気持ちの良い場所であり、各々部屋を持っていても必ず誰かが居たという。キッチンについては、山田の娘から「母は対話をしながら料理を作ったのだと思う」という話が出る通り、ファミリールームに接して対面式であることで、客を招いた際も皆が手伝いたくなるようなキッチンであった。山田の晩年は、フォーマルリビングにベッドを置いて就寝し、ファミリールームと行き来する生活であったことがわかった。

## ●「鎌倉の家」における設計提案

以上から、「昭和初期の家」における空間的な要求は、「鎌倉の家」の設計提案で、主に以下の3つの要素として顕れていることがわかった。

### ①採光計画

「鎌倉の家」では、南東に大きく開口を持ったファミリールーム、ガラス屋根の浴室、2階個室のハイサイドライト、蹴上を利用した階下への二次採光など、積極的に光を取り入れる工夫が見られるが、「昭和初期の家」で陽当たりの重要性を実感し、反映したのと考えられる。

### ②キッチンの位置付け

「昭和初期の家」の台所は、家族が居る空間とは離れており、調理の時間も孤立していた。それに対し「鎌倉の家」ではキッチン住宅の中心に据え、ファミリールームと一体化した対面式としている。また詳細に設計された収納家具や、廊下からの裏動線など、利便性も考慮されている。

### ③ファミリールームとフォーマルリビング

「昭和初期の家」では、「家族みんなが集う場」は住まい方の変化に伴い場所を変えていった。著書『居間の家族学—ゴロ寝の出来る家がいい』（グロービュー社、1984年）によると、山田は「鎌倉の家」で、家族全員が揃う短い時間で濃密な交流が出来ることをテーマとしていたが、ファミリールームに「光」と「食」という求心力の高い要素を持たせ、居心地の良さを与えたことで、長い時間の中でも変わる事のない「家族みんなが集う場」を位置付けている。

フォーマルリビングは、LDK型の増加・個室化により住宅から客間が消えていった時代に、接客空間を無くすことなく多目的な空間に再構成し実現している。他者の来訪という家族にとって非日常のシーンを生活に織り込むことで、社会との接点を持ちながら、季節に触れたりアートを鑑賞したりする機会を取り入れている。

「藝」と「晴」2つの居間があることで、各々の性質はより鮮明になっているが、一体空間としてお互いの気配は感じられるよう、柔らかに視線を遮る家具や衝立、視点が切り替わる段差など、設計による工夫が凝らされている。

またファミリールームが家族で過ごす時間の中心として確立したことで、その他の室が自由な位置付けとなったことや、フォーマルリビングが様々な生活の状況を受容出来たことにより、家族構成の変化に住宅が柔軟に対応出来ているのと考えられる。

## ●まとめ

「鎌倉の家」の設計提案では、「昭和初期の家」での「暮らしの問題点」に対する「解決の試み」が実行されただけではなく、伝統的な空間構成の要素も再構成する形で活かし反映されていたことがわかった。住宅設計における理念が実生活から生まれたものであることは、山田の設計のひとつの特色とも考えられ、今後は自邸以外の住宅作品とも併せて分析を行い、その空間理念の展開や影響について明らかにしていきたい。